

インフィニット・スト ラトスSKL

ジャッキー007

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は物心ついた時から銃を握り、人を殺めてきた。

人生の最期の願い：・自分の意志で生きたいと言う願いは、神の気まぐれで叶えられる事となる。

少年は物心ついた時から姉弟と比較され、貶されていた。

そして：・13歳のある日、少年は運命の出会いを果たす。

彼らの歩みに大義名分などない。

自分の意思で生き、自分の好きなように死ぬ。

誰にも比較されぬ、一人の人としての己を貫くため、彼らは鋼鉄の魔神を駆る。

目次

プロローグ1	1
プロローグ2	5
プロローグ3	10
プロローグ4	15
プロローグ4	23
プロローグ4	34
プロローグ4	41
主人公設定	45
第一話 IS学園	52
第二話 再会	59
第二話 再会	68
閑話 ある少年少女の話	73
第三話 邂逅	78

第三話 邂逅	78
幕間 始まりを告げる鐘	83

プロローグ 1

物心つく頃から、俺は銃を握っていた。

安全装置を外し、照準を合わせ、引き金を引く。

何年も何年も、繰り返して来た。

この手が、数えきれない程の人の血で濡れた。

硝煙と銃声、悲鳴と怒号。

俺は、それしか知らなかった。

それだけが、俺の全てだった。

「は……あ……」

ずっと駆けてきた戦場に横たわり、俺は小さく息を吐いた。

両手に握った銃…… M9はとつくに弾切れになっており、余分なマガジンは残っていない。
ない。

それだけじゃない。腹部と大腿部、そして……胸に銃弾を受けている。

心臓を一撃で打ち抜かれてはいないが、致命傷を負っているのは確定のようだ。

これは、多くの人をこの手で殺めてきた自分への罰なのだろう。

そう思うと、思わず自嘲の笑みを浮かべてしまう。

まったく、碌でもない人生だったな。

もし、再び、人としての生を神が許してくださるといふのならば

「今度は、自分の意志で生きてみたいな。」

そう呟いて、俺は瞼を閉じた。

「へえ、面白い子が居たもんだね」

ゆつくりと死を受け入れようとしていたとき、不意に声が聞こえた。

「……誰だ？」

瞼を開け、視線を向けた先に居たのは、小さな子供だった。

自分と同じアジア系特有の肌、黒い髪。

戦場に居たとは思えない清潔感のある、純白のワンピースを纏った少女は、笑顔を浮かべたまま俺を見ていた。

「今まで見てきたけど、君、随分と面白いね」

「俺が、面白いだど？」

少女の言っている言葉の意味が全く解らない。殺し屋として育てられ、この手を血で濡らしてきた俺が面白いだと？

「うん。君が生まれてからずっと君を見てきたけど……君は何度も死んでも可笑しくない状況に陥ってたよね？そして……それから必ず『君だけは』生き残ってきた」

少女の言葉に、俺は目を見開いた。

彼女のいう言葉には、心当たりがあつた。

俺が殺し屋として育てられていた頃や、戦場に立つてから今まで……何度も窮地に陥った事がある。

それも、それら全てが死んでいても不思議じゃない状況だった。

しかし……俺は今まで必ず生き残ってきた。

何時からかは忘れたが、俺と仕事に向かった者は必ず死ぬと噂され、気づいた時には死神と恐れられた。

「何故……それを知っている？」

「さつきも言つたけど、君が生まれた頃からずっと見てきたからね」

俺の呟きに返答すると、少女は笑顔で俺を見た。

「だから……君にはもう一度、人として人生を謳歌してもらおうと思うんだ」

俺に：人としてもう一度人生を謳歌してもらおう。

馬鹿な、そんな事が出来る訳がない。仮に出来たとしても、それを可能に出来るのは……。

「私たち神しか居ない」

俺の考えに答えるように、少女は呟いた。

「ただ、普通に人として転生してもらおうのはつまらないからね……君には、ある男の子の中で眠っていて貰おうかな。大丈夫、ちゃんと目醒める時期は決めているから」

「待ってくれ、話が急すぎて全く追いつかない。君は何を……悪いけど、これは決定事項だよ」

なんとか少女の言葉を整理しようとしたが、彼女の言葉に一蹴されてしまった。

それどころか、少女が俺の額に触れた途端に再び強い眠気に襲われる。

「彼に出会うまではゆっくり眠っててね……それと」

藁に捕まる思いで眠気に抗いながら、俺は少女の言葉を聞き続ける……というより、それしか今の俺には出来ず。

「真上遼……それが、私が君に与える新しい名前だよ」

その言葉を最後に、俺の意識は途絶えた。

プロローグ 2

物心ついた頃から、俺は姉弟と比較されて生きてきた。

俺がどれだけ頑張っても、出来の違う姉と弟が居たから「これくらい出来て当然だ」と言われ貶される始末。

その風当たりは、ある事件を切っ掛けに更に厳しさを増した。

篠ノ乃東博士によるパワーダンス… ISの発明と、「白騎士事件」

それによって男女のパワーバランスが崩れた。

これによって、俺は更に姉弟と比較される事となった。

なぜ、皆は俺を見てくれないんだろう。

なぜ… 皆俺を「織斑千冬の弟」としてしか見ないんだ。

俺には、「二夏」という名前があるのに…。

そして… それは今、目の前に置かれている状況でもそうだった。

俺は、千冬姉が出場するISの技能大会「モンド・グロッソ」を観戦するため双子の弟である「秋斗」と二人ドイツに来ていた。

そして、千冬姉の試合まで時間があるからと市街地を観光していたとき……俺は誘拐された。

「ガキ一人誘拐するだけで俺らを使うって、このガキそんなに重要なのか？」

「ああ。なんせ、あの織斑千冬の弟だからな」

使われなくなった廃工場で縛られた俺は、誘拐したグループの話に聞き耳をたてていた。

「どうやら……千冬姉のモンド・グロツソ2連覇を台無しにしたいが為に俺を誘拐したことになる。」

「下手に動こうとしない方が良いで、死にたくはないだろう……織斑秋斗君？」

犯人グループの一人が銃を持ったまま俺に声をかけてきた。

下手な動きも何も、中学生の俺には何も……待て、目の前の男はなんと言った？

秋斗……まさか、コイツら……

「オイ、どういう事だよリーダー！」

「なんだ騒々しい、少しは静かに」出来るかよ！なんで織斑千冬が決勝戦に出たんだよ！……」

隣の部屋から出てきた仲間の怒声に、リーダーと呼ばれた男は眉根を寄せた。そして「それだけじゃねえ！監視カメラの映像をジャックしてみたら、誘拐してきた筈の織斑

秋斗が観客席にいやがるぞ！」

その言葉を聞いて：男は目を見開いた。

「おい…坊主」

男は、俺に声を掛けながら銃口を此方に突きつけてきた。

「もう一度聞く…お前は織斑秋斗か？」

「…一夏…俺は、織斑一夏だ」

銃口を突きつけられた事で再び襲う恐怖に堪えながら名前を呟くと、男は舌打ちした。

「忘れてたな…織斑千冬の弟が双子だったという事を…織斑千冬はまだ試合中か？」

「あ、ああ…生中継だから間違いない」

男達の言葉を聞いていた俺は困惑していた。千冬姉や秋斗は…俺が誘拐されている事に気づいていない？

「大方、国のお偉方が自分たちの名譽の為に黙ったんだろう。ただでさえ日本はI Sの事で他の国からの風当たりが強いからな…だが」

そう言うのと、男は銃口を突きつけたまま底冷えするような冷たい瞳で俺を見た。

「それとこれは話が別だ。織斑千冬の決勝戦出場を辞退させなければ弟の命はない…向

そして…それを更に裏付けるのは、ノースリーブのジャケットで申し訳程度しか隠さ
れていない筋肉。

これが…俺と、後に俺の兄貴となる男…海動剣かいどうけんとの出会いだった。

プロローグ3

俺が織斑の家を捨て、海動剣：兄貴の元に身を寄せて、2年の月日が経った。

兄貴について行って最初に解った事は、兄貴は何処の国にも所属していない：所謂無国籍の私設軍「WSO」の戦闘チーム「スカルフォース」に所属する特別中尉という事実だった。

無国籍という事は国に縛られないという意味では楽かもしれないけど：よくよく考えれば、内戦などに参加した場合テロリストとしての扱いを受ける危険がある。

故に、スカルフォースは傭兵という立場で戦場に立ち、食いつないでいるという事だった。

2年の間で、俺はいろいろな人と関わってきた。

兄貴は勿論、グレンファルコン隊の皆やスカレット姐さん、俺たちの住居兼移動手段である高性能潜水艦「スカーフエイス」のクルー達。

色々な人と関わり、様々な術を知っていった。

刀やナイフの扱い方や格闘技術、簡単な銃の扱い方や整備の方法、サバイバルの技術そして：人を殺す術と、生き残る為の覚悟など。

生傷は堪えなかったし、特に兄貴と姐さんの2人に教わっていた時なんか、血反吐吐いて生死の境を彷徨った事だつてある。

それでも…俺は折れなかった。

スカーフエイスの皆は、俺を見ていてくれた。

織斑千冬の弟としてじゃなく…一人の「一夏」として。

だからこそ、俺は折れる事なくここまで来れた。

自分を貫く為に…生きる為に。

兄貴についてきた当時13だった俺は、今年で15歳になる。

背も伸びて、今では兄貴と頭一つ分しか変わらない。

それだけじゃない。2年の間兄貴を見て育ててきた事もあつて、好みや言葉遣いもすっかり兄貴みたいになった。

何時だったか、グレンファルコン隊の皆から「海動が2人に増えた」なんて事も言われた。

それくらい…今の俺と兄貴はそっくりだった。

他にも、変わった事はある。

14の秋から、俺は兄貴の所属するデスカプリース隊に所属する事になったのだ。

コードネームはアモン7。兄貴と連番になった。

と…結構物騒な所に居ながら俺は人生を楽しんでいる。

「おーい、一夏あ」

モノローグみたいな考え事をしていると、後ろから声をかけられる。

視線だけを向ければ、そこに居たのはさつき話に出てきたグレンファルコン隊の皆。しかも全員がステンレスのお盆を持って俺の方を見ている。

…さつきから何をしてるかって？決まってるんだろ。

「わーったから、並んで待ってるよ」

「早くしてくれよ？今じゃ此所での一番の楽しみなんだから」

厨房でおっさん達に紛れて料理してんだよ。

「海動」

「あ？」

スカーフエイスの格納庫に居た俺は、後ろから声をかけられた。

其処に居たのは、グレンファルコン隊の隊長…スカーレット・ヒビキだった。

「何を考えてたんだ？」

「別に、テメエには関係ねえだろ」

「まあな」

スカーレットの質問に素つ気なく返事を返すと、少し口角を上げてスカーレットは笑った。

「一夏が来てもう2年になるんだな」

その言葉に、俺は昔の事を思い出す。

アイツに会ったのは2年前：第二回モンド・グロツソのあつた年だった。

ただの気まぐれであそこに行つて、そして：アイツ、一夏に会った。

あの時は、自分の気まぐれを呪つたね。ガキが「俺を連れて行つてくれ！」なんて行つて勝手についてきやがったのだから。

だから、稽古という名目で何度もボコツた。

ガキが興味半分で来る場所じゃねえ。家で大人しくママの乳でも吸つてなつてよ。

だが、一夏は折れる事はなかった。

それどころじゃねえ。俺やスカーレット、他の奴らの技を盗んでどんどん成長していった。

そして：気づいたら、奴は此所の一員になつていた。

初めは全員、どつかの国で捨てようと考えてやがった：だが、一人、また一人と一夏と関わった奴はアイツを認めていった。

俺も、その一人になっていた。

そして、アイツは今や織斑の名を捨て「海動一夏」として生きている。

「……」

考えるのを止めて、俺は目の前に立つ相棒を見上げた。

長年コイツに乗って、俺は戦ってきた。

だが、ここ最近…コイツは本調子を出さねえ。

「コイツを、一夏に会わせるつもりか？」

今まで黙っていたスカーレットが、相棒を見上げる俺を見て聞いてきた。

「ああ」

「一夏なら…カイザーを扱いきれるというのか？」

スカーレットの言葉に、俺はすぐに答えを返せなかった。

長い間俺を見て育ってきた分、一夏の戦い方は俺とスタイル同じ近接戦闘に特化している。

それじゃあ、相棒…カイザーの全力は引き出せねえ。

だが…

「アイツなら、出来るかもしれねえ」

確証はねえが、勘がそう告げていた。

プロローグ4 Aパート

「なんなんだ、兄貴の奴……急に話があるって……」

グレンファルコン隊の皆に飯を出し終わった頃、俺は兄貴から通信を受けた。

内容は「話がある」…… たったそれだけで通信は切られ、代わりに兄貴が居る場所の地図が送信されてきた。

その地図に従ってスカーフェイスの中を歩いてはいるんだが……。

「此所って……」

俺は、廊下を見回しながら昔…… 兄貴についてきた頃の事を思い出した。

『兄貴』

『勝手に呼んでんじゃねえ、殺されてえのか?』

あの頃は俺が勝手について来て、まだ皆に…… 勿論兄貴にも認められていない頃だったから、そう呼んだだけで兄貴は不愉快そうに殺気を飛ばしてきた。

そして…… 保護してもらおう以上タダじゃないから働いてもらう、と艦内を案内されている時だった。

『つ…なあ、この廊下の先って何があるんだ？』

その当時…生活するのに必要な区画の案内をされている俺は、なんとなく兄貴に聞いていた。

興味本位だったのを覚えている。

『テメエには関係ねえ。余計な事聞いてんじゃねえよ』

たった一言。俺の質問は兄貴に一蹴され、スカーレット姐さんに聞けば

『貴様を知る必要はない。命が惜しくない訳ではないだろう？』

と言う脅しという名の拒絶が返ってきた。

それから数ヶ月経ち、此所の皆に認められてなお…俺は今日まで此処に足を踏み入れる事も、此所の事に触れる事も禁止されていた。

というより、触れようとすれば問答無用で兄貴と姐さんと2対1の模擬戦が待っていた。

そこまでして俺に触れる事を禁止していた区画…其処を、俺は歩いていた。

「()か…」

地図の案内に従って歩いた先に待っていたもの…それは、重厚な鉄の扉だった。

それも、ただの鉄の扉じゃない。見た目からも、その先にあるものが重要で…それ

でいて、中のものを外に出さないようにと作られた檻のようだった。

こんな場所に：： 兄貴が居るのか？

そんな事を考えていた時、目の前の扉が急に音を立ててスライドし開いていく。完全に開いた扉の先は光がなく、一面暗闇が広がっていた。

息を呑み、俺は一步部屋の中に足を踏み入れた。

「ツー」

その瞬間、眩い光が暗闇に慣れようとしていた目を刺激した。

咄嗟に腰に帯刀していたナイフを抜き逆手に構え、周囲の状況を確認する。

人の気配はチラホラとあるが：： 敵意はない。

だが：：

「：： なんだよ、これ：：：」

俺は、光に慣れた目が捉えたソレにさつきまでの集中を切られてしまった。

ソレは、一言で言えば巨人だった。

と言つても其処までデカくはない。せいぜい3〜4mくらいだ。

目の前に悠然と立つソイツは、漆黒の鋼を身に纏い

悪魔の顔をイメージする紅の胸飾が全身の黒を際立たせている。

金色に輝く二本の角を持つ頭部……。特に、頭頂部の形なんかは、中央の髑髏の意匠も併せて王冠の用に見えた。

俺の目の前に立つ鋼鉄の巨人……。その姿は、王と呼ぶには存在感が強すぎる。

「皇帝……………」

無意識に小さく呟いた言葉、それが目の前の巨人には一番相応しかった。

「ほう、見ただけでソイツの名前を言い当てるか」

「スカーレット姐さん、それに兄貴も……………」

横からかけられた声に左を向くと、其処には俺を此処に呼んだ張本人である兄貴……海動剣と、スカーレット・ヒビキの姐さんが居た。

「俺はついでかよ。まあ良い……。一夏、お前を呼んだのはコイツを見せる為だ」

何処かふてくされるように言いながら、兄貴は俺の前に立つ鋼鉄の巨人を顎でしゃくった。

「カイザー……。それが、コイツの名前だ」

「カイザー……………」

兄貴の言葉を聞きながら、改めて俺は巨人の……。カイザーの名前を呟く。

『KAISER』……。ドイツ語で『皇帝』を意味する言葉。

成る程、俺がアイツを見て感じた事は概ね合っていた、という事か。

俺は、改めてカイザーを見た。

その雄々しく佇む姿は、皇帝の名を持つに相応しい姿だろう。

そして……初めてその姿を見るにも関わらず。

俺には、コイツを扱えるという漠然とした自信があつた。

「……一夏」

カイザーを見ていた俺に、スカーレット姐さんが声をかけてきた。

姐さんを見ると、姐さんだけじゃない。

兄貴も、俺を見て笑っていた。

まるで、何か確信をしたかのように。

そして……

「カイザーに触ってみろ」

俺に、そう言ってきた。

カイザーに触ってみろ……その言葉に従い、俺はカイザーの足下まで近寄つた。

姐さんの言葉の意図は掴めない……だが、促されるままに俺は右手でカイザーに触れた。

ヒンヤリとした鉄の冷たさに、俺は目を閉じた。

そして…

… ドクンツ…

「！」

微かに感じた脈動に、俺は思わず我に返って目を見開いた。

さつきまで触れていたカイザーが、目の前にない。

それどころか、目の前に広がる風景がまるで違っていた。

辺り一面白が延々と続く空間…俺は其処に立っていた。

「何が…起きてやがる…」

目の前の状況に、俺は混乱していた。

兄貴や姐さん… 皆はいったい何処に行っただけなんだ…？

「んっ…」

不意に聞こえた声に、俺は後ろに振り返る。

其処に居たのは、一人の男だった。

無造作にセットされた肩まで伸びた髪でよく見えないが、微かに覗く瞳は鷹のように鋭い。

グレーのコートを羽織っているソイツは、俺を一瞥するとゆっくり立ち上がり、俺の

方へ歩いてきた。

「……………」

互いに何も言わずに互いを見る。

「……成る程」

俺を見ていたソイツは、何かを理解したように小さく頷いた。

「オイ、何勝手に解ったように頷いてやがる」

「いや、俺が目覚めたという事は、時が来たという事だろう」

男の言っている事は全く訳が分からない。

目覚めた？時が来た？何を言ってるやがんだ。

「兎に角、お前とはこれから長い付き合いになるだろう。そして……コイツともな」

そう言うと、男は俺から視線をそらして上を見上げた。

それに釣られて上を見上げ……俺は呆気にとられた。

「な……………」

今まで辺りには俺と前に立つ男しか居なかった場所に、黒く巨大な影が浮かんでいた。

その影には見覚えがある……いや、更に言えば先ほどまでソイツに触っていたから解る。

「カイザー…： そうか、それがお前の名か」

男がカイザーの名前を呼んだ事に、俺は男を見た。

なんでカイザーの名前をコイツが…：

「お前、いったい…： 「真上遼…： それが、俺の名だ」

俺の質問を遮るように、男…： 真上は俺を見た。

プロローグ4 Bパート

「海動」

「なんだよ」

カイザーに触れる一夏を見ながら、スカーレットが声をかけてきた。

視線だけを移動させると、スカーレットは訝しむ様子で一夏を見ている。

「一夏のヤツ…何時までカイザーに触っているつもりだ？」

その言葉を聞いて、俺は改めて一夏を見た。

あれから3分…一夏は、カイザーに触ったまま微動だにしていない。

その異常性に気づいたのか、周りの奴らも不安そうに一夏を見つめていた。

つたく…仕方ねえ。

俺は、一夏の下へ歩いていき、カイザーから手を離そうとして…手を止めた。

「…オイ」

俺の言葉を聞いて、一夏はゆっくりとカイザーから手を離して此方を振り向いた。

「デメエ…誰だ？」

時を遡れば数分前…目覚めたばかりの俺は、宿主とも呼べる少年…織斑一夏と向かい合っていた。

「真上…お前はいつたい」

「ふむ…」

織斑一夏…いや、今は海動一夏と名乗っている少年の質問に、俺は腕を組む。

自分の事を語るにしても、荒唐無稽な話だし…なによりコイツだけが理解しても周りに受け入れられなければ俺が俺として生きる事は叶わない。

そんな時だった。

背後から誰かが歩み寄る気配を感じ、俺は小さく笑みを浮かべた。

「海動一夏」

「な、なんだよ」

たった今思いついた…この少年と周り、その全てに俺を知ってもらう方法を実行するために。

「少しの間、身体を借りるぞ」

俺は…海動一夏の主導権を一時的に奪い取った。

目を開けた先に見えたのは、黒鋼の躯体。

俺があの場所で出会った彼……カイザーだという事を理解するのに時間はかからなかった。

そして……それと同時に襲いかかってくる記憶の津波。

今居る場所や出会った人々……海動一夏が今日まで見てきた記憶が頭の中に流れ込んでくる。

いや……頭の中、というのは語弊だろう。

正確に言うとなれば……魂に刻み込まれていく、と言うべきか。

この身体は海動一夏の身体であり、俺はその身体に宿る寄生虫のような存在だ。故に、この表現が正しいと言えるだろう。

「……オイ」

不意に、後ろから声が聞こえた。

振り返った先に居たのは、一人の男。

纏っている服に差異はあれど、この身体が纏っている服と変わらない。俺を突き刺すように睨みつけるその瞳は、飢えた獣のそれに似ている。

先ほど刻み込まれた記憶を掘り返して、該当する人物は一人だけ。

成る程……この男が海動剣か。

「デメエ……誰だ？」

彼のその言葉を聞いて、俺は目を見開いた。

彼らから見て、俺の姿は海動一夏にしか見えない。

だが、この男は俺という存在に気づいた。

面白い男だ…。

「俺は…真上」

そして俺は…辺りに居る人達を見回した後

「真上遼だ」

彼らに聞こえるように、名を名乗った。

彼らに全てを話した後…格納庫の中には居心地の悪い静けさが漂っている。

「…真上、と言ったな」

全員が黙っている中、スカーレット大尉が口を開いた。

「貴様の話だが、ハッキリ言うと言信し難い。いや、信じられる内容ではない」

彼女の言葉を聞いて、俺は嘆息した。

まあ、無理もないだろう。

神と名乗る少女によって海動一夏の中に宿った元殺し屋など、誰も信じる話ではない。

だが

「よつて…貴様には、我々グレンファルコン隊と模擬戦を行ってもらおう」

唐突に、彼女は俺を見てそう言ってきた。

「信じられる話じゃないのではなかったのか？」

「ああ、安易に信じていい話ではないだろう。だが、貴様は先ほどの話に虚言を交えたか？」

まさか。彼女の言葉に首を振って答える。

「ならば、貴様の言葉が正しいという事を行動で示せ。此処に居る全員を貴様が認めさせる」

スカレット大尉の言葉によって、俺たちは現在艦内にある訓練室へ来ていた。

辺りを見回せば、彼女の言っていたグレンファルコン隊の隊員達が俺へ怪しむような視線を投げ掛けている。

(…大方の流れは予想していたが、これからどうなる事やら…)

そう考えながら、俺は腰に装着したホルスターに触れる。

指先に伝わる鉄の感触は、生前俺が愛用していたものと同じM9のグリップ。

模擬戦と言うことで銃弾はペイント弾を使用するが、コレに触れると、戦場を駆けていたのがつい昨日のように思えてくる。

「用意は出来たか。これからグレンファルコン隊と真上遼の模擬戦を行う。ルールは二つ。此方が戦闘不可能と認めた場合、即刻に戦闘を中断する事。そして、各自使用する武器は模擬戦専用のものを使う事」

訓練室に設置されたスピーカーから、モニター室に居るスカーレット大尉の声が聞こえる。

それと同時に、隊員達の気が引き締められ、意識が昂つていくのを感じた。

「……」

俺は、腰のホルスターに収めたM9二丁を抜き、安全装置を解除する。

既に薬室に銃弾は込められており、後は狙いを定めて引き金を引くのみ。

「……」

息が苦しくなる錯覚を覚えると同時に、室内の緊迫感が一層強くなっていく。

チラ、と辺りを見回せば、隊員達は全員各々武器を構え、開始の合図を待っていた。

一分、一秒がとても長く感じる。

「それでは、始め！」

そして、その合図と同時に俺は目の前に居た隊員の懐へ飛び込んだ。

「っ！」

俺の動作に気づいた隊員が握っていたナイフを振り上げ迎撃しようと試みる。

だが…遅い。

俺は彼の動きを制限するに密着するように左肩を押当てると同時に、右手のM9の銃口を胸元に押しつけ…両手の引き金を引いた。

響いた銃声と飛び散ったペイント剤は二つ。

一つは目の前に立つ男…もう一つは、その向かいに立っていた男。

それを切っ掛けに、隊員達は雪崩のように押し寄せてきた。

ナイフを、警棒を、模造刀を、銃を構え、敵^{われ}を倒す為の行動に移っていく。

しかし、その隙さえあれば十分だった。

最小限の動きで攻撃を捌きながら次々と狙いを定め、休み無しに引き金を引き続ける。

その度に眉間や胸に紅の花を咲かせていく隊員達。

気づけば、開始してわずか4分で20人全員が戦闘不能になっていた。

「…何だ、あの動きは」

俺たちは、訓練室の近くにあるモニター室で模擬戦の様子を見ていた。

モニターを見ながら呟いたのは、スカーレット。

俺も、その言葉に同意だった。

俺たちは今まで一夏を鍛えてきたし、銃の扱いも教えていた。

だが…今まであんな動き方を教えた事は一度もない。

最小限の動きで相手の動きを捌き、制限するだけではなく…的確に一発で相手を仕留める。

そんな動き…それこそ、長年の訓練や研鑽でしか至れない境地の動き

それを、モニターに映る一夏…いや、真上の奴は行っていた。

「…」

その映像を無言で見ている一人の男。

WSO参謀の荒神谷…コイツもまた、若い頃は各地で傭兵をしていた猛者の一人だ。

荒神谷は、ジツとモニターを睨んだまま、硬く引き締めていた口を開いた。

「…君たちは、『二丁拳銃』^{トゥーハンド}と呼ばれた男を知っているか？」

俺とスカーレットは、言葉の意味を掴めないまま首を横に振る。

「20年前、傭兵達の中で噂されていた男だ。二丁のM9を手に、たった一人で一師団を壊滅に追いやった殺し屋…二丁拳銃」

「…参謀は、その男の事を知っているのですか？」

言葉を聞いていたスカーレットの質問に、荒神谷は首肯で答える。

「私も嘗て、あの男を見た事がある…海動一夏のあの動き、あれはあの男そのものだ」
その言葉を聞いた俺たちは、改めてモニターを見る。

其処に映つたのは、ペイント弾で顔や胸が汚れた隊員達と、跳ね返った塗料で顔を濡らした真上の姿。

「時に、君は海動一夏をカイザーに触れさせたそうだな？」

さつきまでモニターを見ていた荒神谷は、俺を見て聞いてきた。

「ああ」

「何故か…教えてくれるかね？」

そう言われて、俺は頭を掻いて面倒そうに溜め息を吐いた。

「理由なんざねえよ。ただ、一夏ならカイザーを完全に扱いきれると思っただけだ」

俺の言葉を聞いて、荒神谷は腕を組んで再びモニターを睨んだ。

格納庫での邂逅…そして、グレンファルコン隊との模擬戦から数時間後、俺…海動一

夏は自室で数日間の待機命令が下されていた。

その間、改めて俺は真上の話を聞き…少しずつだが、奴を認めていた。こうしている間も、俺たちは気が気じゃない。

上の方々がどんな判断をするのか…それが気になっていた。

運が良ければ船を降ろされるだけでなんとかなるだろうが…下手したら実験材料として解剖とか

『海動、不安になるのも解るが…そう考えてばかりだと気が滅入るぞ』

「元はと言えば、お前が原因だろうがよ」

頭の中に響く真上の声に、不機嫌そうに返事を返す。

「第一、なんでこうなるんだよ…」

『恨み言なら、全ての元凶はあの神ではないか？』

頭を抱えながら呟いた言葉に返ってきた真上の返事に、俺は大きく溜め息を吐いた。

そんなやり取りが数時間続いた頃、突然部屋の扉が開いた。

「よお、一夏。生きてるか？」

「兄貴…」

入ってきて早々、質の悪い冗談を言ってきたのは兄貴だった。

そして…

「荒神谷のオッサンが呼んでるぜ、ついて来いよ」

続けざまに兄貴が発した言葉は、今の俺にとって死刑宣告に近かった。

「海動一夏、入ります」

艦長室の前に立ち、俺は数回深呼吸を繰り返した後、俺は室内に入っていった。

中で待っていたのは、荒神谷参謀だけじゃなかった。

其処に居たのはスカーレット姐さんと参謀副官の唐古さんの二人。

それに兄貴を居れて4人：全員が俺を見ていた。

突き刺さるような8つの視線に、俺は思わず身を強ばらせる。

参謀は、他の3人に目配せをした後、改めて俺を見る。

その間の沈黙がとても辛く、俺は終わりを覚悟した。

俺は、固唾をのんで参謀の次の言葉を待つ。

そして…

「海動一夏、ならびに真上遼。両名を特務中尉…そして、カイザーの正規パイロットとして任命する」

参謀の口から発せられた言葉は、俺が予想していた言葉の遥か斜め上をいていた。

第一話 I S学園 Aパート

快晴の空の下…俺、海動一夏はある建物の前に立っていた。

「此所がI S学園か…」

目の前にある近未来的な建物を眺めながら、俺は小さく呟く。

正直言えば、俺はこの国に帰ってくるつもりなんて最初からなかった。

だが…何故か俺は、再びこの地に…日本に來ている。

「なんでこうなってるんだろうな…」

『それを言うか…全ては、あの日を呪うんだな』

俺の呟きを聞いていた真上の言葉を聞いて、俺は深く溜め息を吐いた。

そう…事を遡れば「あの日」に遡る。

「…はっ。」

荒神谷参謀に呼ばれた俺に待っていた言葉…それは、俺と真上を特務中尉…そして、カイザーの正規パイロットとして任命するという斜め上ぶつ飛んだ言葉だった。

「ちよ、ちよつと待ってください！急になん事言われても、俺は何がなんだか」

「我々で話し合った結果…そして、カイザーの意志だ。諦める」

漸く言葉の意味を理解した俺が慌てふためいていると、俺を見ていたスカーレット姐さんがそう言ってきた。

「つつても…参謀達は真上の事を認めるんですか？それにカイザーの意思って…」

「君が狼狽えるのも理解出来る。確かに真上遼が君の中に居る、というのは荒唐無稽な話…だが、それは我々全員が確認した事実だ」

俺の言葉を聞いていた荒神谷参謀が俺を見てゆつくりと話しかけてくる。

「それに、そんな君だからこそ…カイザーは君をパイロットとして認めたのだよ」
そう言って微かに口角を上げて笑う参謀だが、俺には全く意味が分からない。

「だいたい、カイザーの意思って…それじゃまるで、カイザーに意思が…」

「一夏、お前カイザーがただのロボットだと思つてねえか？」

不意に、兄貴が小馬鹿にするように俺を見てきた。

「お前はカイザーに触つた時…何も見なかったのか？」

兄貴の質問を聞いて、俺は口を噤んだ。

心当たりがあつたからだ。

カイザーに触れた時に見た、あの白い空間と巨大なカイザーの影。

「…兄貴も、アレを見たのか？」

「お前の言うアレが、俺が見たのと同じならな」

俺の質問に、兄貴は口元を歪めた。

「カイザーは自分の意志を持っている。そして：アレのパイロットになった人間は皆、巨大な影を見たと言っていた」

俺たちの様子を見ていた倉古参謀副官が口を開いた。

「カイザーのパイロットには、誰もがなれる訳ではない。アレに触れ、パイロットの資格があると認められた者だけが、カイザーのパイロットになれるのだよ」

副官の言葉を聞いて、俺は大きく溜め息を吐いた。

正直、話にまつたくついていけない。

だが、コレだけは解った。

「…解りましたよ。その任命、ありがたく承ります」

今言い渡された任命は絶対という事だけはな。

その後、俺は兄貴にカイザーの扱い方や装備について教わった。

最初に知った事は、カイザーは全身装甲のパワードスーツ：まあ、I Sに近い存在という事だった。

選ばれた人間しかパイロットになれないパワードスーツなんて、I Sと同じだ。

だが、カイザーはパイロットとして認められさえすれば誰でも扱える。

それが男だろうが、女だろうが…だ。

そして、今の状態のカイザーは武装をフルには扱えない。

使えるのが、胸飾だと思っていた二丁拳銃「ブレストリガー」

身の丈はある大剣「牙斬刀」

そして、両腕のロケットパンチ…正式な名前があるが、それは今の俺が知る必要はないらしい。

兄貴も少し前まではカイザーのパイロットだったけど、使ったのは牙斬刀とロケットパンチだけだというのに驚いたが…

「銃なんて扱いが面倒クセえの使えるかよ」

という理由を聞いて、俺は納得した。

兄貴、銃の扱い知っててもノーコンだったし…あの性格だからな。

俺も兄貴から教わってた分、刀とかナイフの方が使いやすいし。

そういうことで、刀は俺で銃は真上、という役割分担が自然に出来ていた。

それから数ヶ月後、カイザーの扱いにも慣れ、真上との折り合いもついた俺は兄貴と姐さんの3人で買い出しに来ていた。

「…なあ、兄貴」

「あん?」

シヨッピングモールで必要なものを買いそろえている途中だった俺は、中央のイベントスペースに出来た人ばかりを見ていた。

「アレって何だ?」

「どうやら、男性対象でI Sの起動実験を行っているらしい」

近くの係員からチラシを貰った姐さんが、俺に人だかりの原因を教えてくれた。

なんでも、I Sを動かした男が居たらしく、それが原因で世界各国で起動実験が行われているんだそうだ。

「I Sねえ…」

姐さんの説明を聞いて思い出すのは、苦々しい思い出。

兄貴達に出会う前に経験してきた、周りに比較され、貶される記憶だった。

「オイ一夏、お前も触ってきたらどうだ?」

「興味ねえよ。兄貴が触ってきたらどうなんだ?」

面白そうに笑う兄貴の言葉をバツサリ切ると、返すように兄貴を流し見る。

「その辺にしておけ、次の買い物に行くぞ」

呆れたように溜め息を吐いた姐さんを先頭に、俺たちは次の目的地へと向かって行く。

そして、俺たちが道中にある、実験会場の横を通り過ぎようとした時だった。
ドンツ

突然の衝撃に、俺は横に倒れかけた。

視線をずらせば、反対方向に歩いていく女の集団。

成る程…俺はアイツらにぶつかつた訳だ。

(…って、それどころじゃねえ！)

普段なら即座に反応出来たんだろうが…その時の俺は反応が鈍かつた。

咄嗟に身体を支えようと左足に力を入れ、捕まろうと左手を伸ばして柱らしいものに
捕まる。

それがいけなかつた。

「！」

キーン、という金属音と一緒に、頭の中に情報が流れ込んできた。

俺は、ゆっくりと左手で掴んでいるものを見る。

「…マジかよ」

其処にあつたのは、翠色の鎧。

世間では「ラファール・リヴァイブ」と呼ばれる、所謂ISで…。

視線を前に戻せば、ポカンと口を開けた姐さんと、必死に笑いを堪える兄貴の姿。

主人公設定

海動一夏（旧姓：織斑）

本編の主人公で、スカルフォース・デスカプリース隊所属の特務中尉

嘗ては織斑千冬と双子の弟「秋斗」^{あきと}の3人で暮らしていたが、二人の能力が他より秀でていた為、血が滲むほどの努力をしようが比較され、罵られる生活を送る。

誰にも自分と言う存在を見てももらえず、認められない憤りを抱えて生きてきたが、それを爆発させ荒んだ人生を歩まずにいられたのも、五反田弾・蘭の兄妹、御手洗数馬、そして鳳鈴音という理解者が居た為。

白騎士事件の後、13歳の頃に千冬が参加する第二回モンド・グロツソを見る為に秋斗とドイツに向かうも、現地で秋斗に間違えられて誘拐。千冬のモンド・グロツソ二連覇を妨害する為の人質にされる。

だが、日本政府の保身の為に誘拐された事実を黙殺され殺される寸前、気まぐれで現れた海動剣に助けられ、彼に憧れついていく事を決意した。

その後はスカルフォースの面々に保護という名目で雑用として扱われる傍ら指導という八つ当たりを受けているうち、次第に認められ正式にスカルフォースの一員とな

る。織斑の姓を捨てたのはこの時であり、それまでは旧姓の織斑と呼ばれていたが、過去の経験から旧姓で呼ばれる事を嫌っている。

15歳になる年にカイザーとの出会い、真上の覚醒を経て特務中尉、そしてカイザーの正規パイロットとして任命される。

コードネームはアモン7

得意とする武器は刀やナイフと言った刀剣類。

スカーレット・ヒビキにも一応銃の手解きは受けているが、本人曰く「面倒くさい」との事。

原作との相違点

原作時よりも肉体は鍛え上げられており、義兄の剣より劣るが身体能力と勘が鋭い。

また、髪の毛は剣を真似て逆立てており、目つきが鋭くなっている。

スカルフォースの一員として戦場で戦った経験から、青臭い正義感や理想論はなく、必要であれば非道になる事も厭わない。

真上遼（生前名：不明）

一夏の中に眠っていたもう一人の主人公。

スカルフォース・デスクアプリース隊所属の特務中尉

嘗ては「二丁拳銃」という異名を持つ殺し屋だったが、任務の途中で銃弾に倒れ、一度目の生を終える。

物心つく前に人身売買で殺し屋を育て上げる組織に売られ、教えられるがままに技術を叩き込まれたため、自分の意志で生きた事がなく、殺しだけが全てだった。

末期に望んだ「自分の意志で生きてみたい」という呟きを神に聞かれ、気まぐれで二度目の生を与えられる。

「一夏がカイザーと出会う」まで一夏の中で眠らされていたため、カイザーに触れるまで一夏を含む全員に存在を知られる事がなかった。

覚醒してからは、グレンファルコン隊との模擬戦や時折人格を交代して表で生活していたのを監視され続けた結果、スカルフォースの一員と認められ、同時に一夏同様カイザーの正規パイロットに選ばれる。

得意とする武器は生前の異名にもなった二丁拳銃での射撃。

近接戦闘の手解きも受けており、銃を用いた近接格闘（所謂ガンIIカタ）も行えるが、本来は射撃に特化しているため、戦闘技術は一夏が上手。

こと射撃に関してはスカルフォース内随一の腕前を持っており、如何なる距離であろうと一発で仕留める。

原典との相違点

外見や声、コードネームは変わっていないが、出生が違う（エルプスユニテではなく、一人の人間だった）為、「運命」という言葉に対する拒絶反応はない。

その他相違点

本作では一夏達の所属する組織W S Oは国に所属する軍ではなく、無国籍の私設兵団となっている。

カイザー他、作中に登場する機体はI Sとは別系統のパワードスーツである。（ただし、カイザーとウイングルが誰の手によつて作られたのか不明な点については原典と変わらない）

第一話　I S 学園　B パート

4 月初頭、入学式が行われ誰一人として居ない廊下を足早に歩いていった。

逸る気持ちを抑えようにも、身体が自分の意志を全く聞き入れてくれない。

それだけ……私、織斑千冬の心は揺れ動いていた。

事の始まりは数年前、あの第二回モンド・グロツソの日に遡る。

その日、私は決勝戦まで勝ち上がり、二度目の優勝を手にする事が出来た。

だが……それ以上の衝撃が私を襲った。

弟……一夏の誘拐。

決勝戦後、駆けつけたドイツ軍の兵から聞かされた言葉に、私は衝撃を受けた。

一夏が誘拐された事など、その時の私は全く知らなかった。

決勝戦前には、日本政府は情報を掴んでいたが、保身の為に黙殺したと……当時、私に付き添っていた政府の人間を問詰めれば吐いてくれた。

取り乱しながらも、ドイツ軍に教えられた場所に向かったが、其処にあったのは8つの死体

一夏の姿は、何処にもなかった。

ドイツ軍と警察に協力してもらい捜索を行ったが消息は掴めず、捜査は打ち切られてしまった。

あれから3年経ち、I S学園の入学式も近くなって来たある日。

私はあるニュースを耳にした。

世界で2番目にI Sを動かした男が現れたのだ。

I Sは本来女性にしか反応しない。

それを反応させたのは…私のもう一人の弟、秋斗だった。

当初は私は関係ない、そう思っていた。

一夏が居なくなつた今、残つた秋斗だけは絶対に護る。

そう誓っていた…筈だった。

海動一夏。

アナウンサーが口にした名前に、私は思考を停止せざるを得なかつた。

誘拐されて数年…未だ消息が掴めない一夏と関係があるかは解らない。

だからこそ…

私は、自分の目で確認する為、校門へと向かつていた。

「一夏」

「ん？」

校門前で、学園側の迎えを待っている傍ら、護衛兼付き添いで来ていた姐さんから声をかけられた。

ちなみに、兄貴は暇そうにナイフの手入れをしている。

「お前の姉は、どんな人だったんだ？」

「どくなって…」

姐さんの言葉に、俺は思わず言い淀んだ。

子供の頃を思い出しても、俺はあの姉と…あのクズの二人と比べられてきた。

それが理由で、俺はあの二人が嫌いになった訳だが…。

「嫌いだけど…嫌いじゃない人、かな」

「…そうか」

俺の漠然とした言葉を聞いて、姐さんは小さく笑った。

兄貴についていった当初は、何故助けに来てくれなかったなんて考えて怨んだりもした。

だけど、それはよくよく考えれば逆恨みでしかない。

あの時、あの女は俺が攫われた事など知らなかったんだ。それを怨んだってお門違いでしかない。

寧ろ、あの時まで俺を育ててくれたことに感謝こそしている。

「……」

だが…、そう思いながら俺は拳を握りしめる。

そんな時、学園の方から一人の女が此方へ歩いてきた。

黒いスーツに背中まで伸びた黒髪。

「…一夏」

パツと見は誰か解らなかったが、俺を呼ぶ声を聞き…漸く誰か解った。

織斑千冬…嘗て、俺を育ててくれた女だった。

目の前に立つ男…一夏は、あれから随分と変わっていた。

髪の毛は逆立ち、目つきも子供の頃とは比べ物にならない程鋭くなっている。

それに、立っている姿でも解るくらい、体つきも逞しくなっていた。

「…一夏」

恐る恐る声をかける。

きつと、私は声が震え、今にも泣きそうになっているだろう。今更、どのような顔をして会えば良いのか解らなかつたのだ。

「…」

私の声を聞いて、一夏はゆっくり口を開いた。

「はじめまして…なんて、言っても納得出来ないか。久しぶり」

一夏のその言葉を聞いて、私は自分の感情を抑える事が出来なかつた。溢れる涙を止める事無く、一夏を抱きしめる。

「一夏…っ」

暖かい。

腕に伝わる温もりが、この現実をはつきりと物語っていた。

「…すまなかつた」

感情のままに声を殺して泣き、漸く落ち着いた所で私は一夏から離れる。

「行方知れずの弟が生きていたんだ。無理も無いだろう」

私が離れた所で、先ほどのやり取りを見ていた赤髪の女が私に話しかけてくる。

「…お前は」

「失礼。私設兵団WSO、グレンファルコン隊隊長のスカレット・ヒビキだ。こっちはデスカプリース隊所属の海動剣」

私の質問に女…スカレットは答えながら、近くに座っていた男を顎で指す。

「一夏、お前は…」

「その事だけど」

スカレットの紹介を聞きながら、私は改めて一夏を見た。

今まで何をしていたのか、など聞きたい事が山ほどある。

何故、海動一夏と名乗っているか…など。

そう考えていると、一夏が口を開き、一枚の紙を渡してきた。

「！」

その紙…離縁状と書かれた紙を見て、私は息を呑んだ。

「織斑一夏はあの時…モンド・グロツソの年に死んだ。この国に見殺しにされてな。此処に居る俺は…WSOの海動一夏だ」

一夏の言葉を聞いて、私は過去の自分を呪った。

あの時、もし私が一夏を助けにいけないならば、こんな事にはならなかっただろう。

これはきつと…一夏を見殺しにしてしまった私に対する神からの罰なのだ。

だから…コレを拒む権利など、私にはない。

「…わかった。だが…」

私は、一夏から離縁状を受け取りながら小さく呟いた。

「…生きていてくれて、ありがとうございます」

第二話 再会 Aパート

兄貴と姐さんが帰った後、俺と…姉貴は二人、学園の廊下を歩いていた。

数年ぶりに再会した事もあって、俺たちは会話をする事無くクラスに向けて足を運び続ける。

「姉貴」

「…なんだ」

歩きながら声を掛けると、姉貴は驚いたように一瞬だけ目を見開いた後、元の表情に戻った。

今更、再び姉と呼ばれる事はないとでも考えてたんだろう。

「…アイツは？」

「…お前と同じ1年1組…私の担当するクラスだ」

「…そうか」

俺の言葉から、誰の事かを理解したんだろう。

姉貴は手短かに返事を返してきた。

織斑秋斗…俺の双子の弟で、姉貴のもう一人の弟。

容姿端麗、頭腦明晰。

おまけに運動神経もよく、礼儀正しく社交的

まさしく、どこに嫁がせても痛くない男だ。

(あくまで、表向きはな…)

『表向き…? どういう事だ?』

俺の思考が流れたのか、それとも言葉に出ていたのか、今まで黙っていた真上が口を開いた。

(そのまんまの意味さ。外面、猫かぶりって事さ)

そう、今まで言った事は、アイツが被っている化けの皮でしかない。

(中身はとんでもないクズだぜ。自己中心的…その一言で片付くくらいにな)

『…聞かせてくれるか?』

俺の言葉に興味を持ったんだろう、真上は珍しく続きを促してきた。

(アイツは他人を石としか思ってたねえ。織斑秋斗という【玉】ぎよくを輝かせる為の石ってな。使える奴は使うし、用がなくなれば即座に切り捨てる。使えない奴には全く興味を示さないし、ゴミ以下って評価しか下さない)

『…お前や姉はどうだったんだ?』

(俺と比較して秀でる事で、自分が優れた人間だってアピール出来るし、姉貴は…ISが

出て以降はネームバリューとして一緒に居るつて所だろ。「織斑千冬の弟」となれば、箔がつくしな)

俺の言葉を聞いた真上は小さく『：クズだな』と言つて再び黙つた。

「着いたぞ、此所だ」

そうこうしているウチにも、俺たちは目的地のクラス：1年1組の前に到着した。

(ふう…：ようやく此所まで来たか)

小さく息を吐きながら、僕：織斑秋斗は辺りを見回した。

見渡す限り女女女…：まあ、無理もないだろう。此所はIS学園、僕一人以外男はいないのだから。

窓際近くには、6年ぶりに会う幼馴染み…：篠ノ乃箒が居る。

彼女の姉はISを開発した篠ノ乃束博士。

更に、僕の姉はモンド・グロツソで2連覇を成し遂げたブリュンヒルデ…：織斑千冬だ。二人の関係者を監視するという事なら、一緒にクラスにした方が良いという判断なんだろう。

改めて、辺りを見回す。

途中、目が合ったのが何人か居るけど、どれもこれも使えなさそうなのばかりだ。唯一使えそうなのが一人：此方を睨んでいるけどね。

(たしか：セシリア・オルコットだったかな?)

イギリスの代表候補生で、オルコット財閥の現当主だったか。

彼女なら、多少は使えるだろうけど：箒には劣るだろう。

使えたとしても、金蔓としてくらいしか価値はない。

僕の隣に立つのなら、やはり箒くらいだ。

あの馬鹿な姉なら、大好きな妹と親友の弟に最良するのは当たり前

恐らく、専用機を用意してくれる筈だろう。

それを使えば、僕は唯一の存在になれる：筈だった。

(誰かは知らないけど：随分と調子に乗ってくれたもんだよ)

僕以外に、ISを動かす男が現れるまでは。

僕の場合、恐らくあの人が何か細工をしたんだろうけど：もう一人は本当に偶然動かしただ。

(まあ、それでも使いようはあるか)

そう考えながら内心ほくそ笑んでいると、教室の扉が突如開いた。

「此所で待っている」

そう言うのと、姉貴は扉を開けて中に入っていた。

：今更だけど、口調がもう少し柔らかくならねえかな。

そんなんだから、貰い手がないんだ。

『：あまり迂闊な事を考えてると、痛い目を見るんじゃないか？』

「仕方ねえだろ、これでも心配なんだよ」

真上の忠告に、俺は小さく溜め息を吐いた。

ハッキリと縁を切ったが、俺が血縁上姉貴の弟である事は変わらない。

それに、俺を育ててくれた人が一生独身なんてのは御免だ。

出来れば良い男を見つけて、人並みの幸せを得てもバチは当たらないだろう。

教室の中から聞こえる黄色い悲鳴にうんざりしながら、俺は考える。

この中には姉貴が言っていた通り、アイツが居るんだろう。

アイツの事だ。俺が死んだと考えて我が物顔でふんぞり返っているに違いない。

「海動、入れ」

しばらくして聞こえた姉貴の言葉に、俺は口を歪めて笑った。

どれ、あの天狗の鼻を押し折りに行ってやりますか。

「失礼します」

短く挨拶をして教室に入った瞬間：俺の頭めがけて黒い何かが横振りされた。

「つと…いきなり暴力はないんじゃないか？」

「お前、さつき余計な事を考えていただろう」

咄嗟にしゃがんで回避したそれは、姉貴の手に持たれた出席簿で：見上げながら声をかけると、姉貴は俺を睨んでそう言ってきた。

（たく…相変わらず勘が鋭い事で）

『剣と同じくらいじゃないのか？』

（違うない）

「別に、そんなんだと行き遅れ…つとお!？」

「口に出さずで言い」

つい口が滑って言葉に出すと、今度は容赦なく出席簿を振り下ろしてきやがった。

ただ叩かれるなら避ける必要はないだろうけど、相手はあの姉貴だ。剣の腕前は達人には及ばないだろうが、相当の腕前を持っている。

そんな奴が振り下ろす出席簿を喰らえば、いくら命があつたも足りねえだろう。

横に飛び退いて躲し、睨み合う俺たちを見て、周りの奴らは全員啞然としている。

教壇に立ってゐる奴なんか、口開いて目が点になつてやがるぞ。

「…まったく。海動、さっさと自己紹介をしろ」

「解りましたよ」

周りの視線を確認していると、件の奴を発見した。

奴はまるで、信じられないものを見ているかのように目を見開いている。

(やっぱり、死んだと思つてたんだな)

ソイツ…秋斗を鼻で笑いながら一瞥すると、俺は黒板の前に立ち

「海動一夏だ。何の因果か、その奴同様不本意ながらISを動かしちゃまった。ISに
関しては知らない事が多いんで、失言があるだろうが大目に見てくれ」

クラスの全員を見回し、小さく口元を歪めた。

第二話 再会 Bパート

自己紹介を終えた休み時間、俺は頰杖をつけて外を眺めていた。

後ろに突き刺さる無数の視線……大方、俺と秋斗を見に来た生徒達だろう。

(客寄せパンダみてえな気分だな……)

「ちよつと良いかい?」

小さく溜め息を吐いていると、誰か……いや、誰かなんて解っているか。

「……」

視線を移動させた先には、あのクズ……秋斗が居た。

「久しぶりだね、一夏。元氣そうでよかったよ」

秋斗に声をかけられた俺は、話しやすい場所に行こうと言われ、屋上に来ている。

だが……コイツが屋上を選んだ理由が話しやすい場所だから、というのは建前だ。

「さっさと本音で話したらどうだ? 此処には誰も来れねえようにしたのは解ってんだ」

「……何時からそんなに鋭くなったのかは、まあ良いだろう」

俺の言葉を聞いた秋斗は、小さく息を吐いた後俺の方を振り返った。

それも、さっきまでの笑顔なんかじゃねえ……ゴミを見るような目だ。

「てつきり死んだとばかり思っていたよ、この織斑の面汚しが。今更どの面さげて戻ってきたんだい？」

「いちいちテメエの顔色窺つて戻つてこなきやならねえ法律でも出来たのか？ソイツは驚きだ」

秋斗の言葉に僅かな侮蔑を乗せて返事を返した：昔は想像も出来なかつた事だな。

今まではずっと言い返そうにも言葉が無かつたんだから。

「…随分というようになつたね。昔はただ言われるままの弱虫だつたのに」

「お前が甘つたるい微温湯に浸かつている間に色々あつたんでね。お前こそ、姉貴に護られてきて随分と乳臭くなつたじゃねえか？さつさと帰つて母乳でも飲んでろよ」

鼻で笑いながら更に言つてやると、秋斗は憎らしげに顔を顰めて睨んでくる。

いくらコイツが凄んできてもガキが睨んできたようにしか感じない辺り、俺もあの時と比べて変わったつて事なんだろう。

「…本当、口が達者になつたもんだよ。まあ、その態度も何時まで続くか見物だけどね」
小さく舌打ちをすると、秋斗は踵を返して教室へと戻つて行つた。

それは寧ろ、此方のセリフなんだがな…しかし。

「本当、乳臭え場所だ…」

屋上から見渡せる学園を眺めながら、俺は顔を顰めた。

「という訳で、I Sは…」

秋斗との再会の後、俺は教室に戻ってきて授業を受けているんだが……どれもこれも、巫山戯てやがるな。

教科書をパラパラと捲りながら、俺は小さく溜め息を吐いた。

アラスカ条約で軍事利用が禁止され、スポーツとして扱われているI Sだが、装備されている武装は簡単に人を殺せるものばかりだ。

競技として戦うのであれば、わざわざ実弾やら真剣を振り回す必要なんか無い。

それに疑問を持たずに真剣に授業を聞いている奴らを見ると、この世界も随分歪んでいる事を実感する。

そもそも、条約なんてのも形だけで、実際中東に赴いた時には内戦にI Sが導入されているのを見た事もあった。

つまり、I Sというのはどれだけ条約や綺麗事というオブラートで包もうが、銃や刀と同じ兵器でしかない。

扱うには、相応の覚悟やら注意事項があるんだが……この教科書には、何も書かれていない。

この学園に入って最初の授業は、落胆のままに終わった。

次の授業までの休み時間の間、俺は屋上で適当に時間をつぶそうとしていた…そんな時だった。

「ちよつと良ろしくて?」

「あ?」

後ろから声をかけられ、後ろを振り返れば、そこには高慢そうな金髪が立っていた。育ちのいいボンボンが着るドレスみたい改造した制服を着た…名前知らねえからドリル頭で良いか。

ドリル頭は、腕組みをして俺を品定めするような目線を送っていた。

「…何か、失礼な事を考えませんでした?」

「別に、その髪型がドリルみてえだなんて思っただけだぜ?」

ジト目で睨んでくるドリル頭に返事を返すと、ソイツは顔を真っ赤にして「私怒ってますよ」と言わんばかりに表情を変えた。

…それは良いんだけどよ、後ろの奴ら笑い堪えんのやめろ。相手に失礼だろ?

特に吹き出したダル袖。お前だ、お前。

「あ、貴方!このセシリア・オルコットに対して随分な物言いですわね!」

「リソシア・フルボッコだか誰か知らねえけど、思ったまま口に出たんだ。仕方ねえだろ」

「セシリア・オルコットですわ！まったく……織斑先生のご兄弟と比べて、無礼にも程がありますわよ」

顔を真っ赤にして怒るセ、セ……ドリル頭は、呆れたように溜め息を吐きながら俺を見る。

……オイ、そのダル袖。どうでも良いけどお前、腹抱えて我慢するくらいなら笑えよ。痺攣起こしてて正直キモイぞ。

つか、コイツ秋斗にも声かけたのかよ。自分からエサになりに行くとか、自殺志願者かコイツ？

「無礼も何も、興味ねえ奴の名前覚える程暇じゃねえからな」

これ以上付き合っているのも面倒だし、俺は欠伸びながらそう言うと、そそくさと屋上に向けて歩いて行った。

途中、ドリル頭がなんか言ってみたけど……相手にするだけ時間の無駄だし、胸糞悪くなるだけだ。

授業に入る前、教室に入ってきた姉さんが口を開いた。

「三限目に入る前に、再来週行われるクラス対抗戦に出場するクラス代表を決める。自

薦、他薦は問わん。推薦がある者は手を挙げる」

その言葉と同時に、何人もの手が挙がり、僕と……そして、あの面汚しを推薦する声があがった。

複数の推薦がある場合、これは多数決で決められるのが一般的だろうけど、此所はI S学園。

おそらくは試合で決められる事になるだろう。

(あの時は随分虚勢を張っていたみたいだけど、この試合で教えてあげるよ……一夏、君が誰に喧嘩を売ったのかをね)

そう考えていた時、一人の女子の声が聞こえた。

「納得いきませんわ!」

そう言つて立ち上がったのは、イギリス代表候補生のセシリア・オルコット。

彼女は僕と面汚しの他にも……この国に対して罵詈雑言を宣っている。

まったく、自分の発言が国際問題になる恐れがあるという事も理解出来ていないのかな。

まあ、これに乗じない手は無い。

彼女の挑発に態と乗つて試合を行い、あの面汚しと代表候補生を倒せば此所での立場も確立するだろう。

仮に代表候補生を倒せなくても、善戦すれば強く印象に残るのは間違いない。

そう思い、僕は彼女とお遊びで口論を繰り広げた。

「で、ハンデはどのくらい付けたら良いのかな?」

僕の言葉に、クラススの奴らが笑い声を上げる。

男が強かったのはI Sが出てくるまでの話だとか言っているけど、コレもある程度予

測は出来た。

それに、彼女が油断すればする程掌で踊らせやすい。

そう思っていた時だった。

「だったら、今証明してくれねえか?女が男より強いつて所をよ」

今まで黙っていたもう一人の男の声と同時に、耳を劈く轟音が鳴り響いた。

「…海、動…くん?」

前の席…いや、それだけじゃねえ。

クラススの奴らが全員呆気にとられた顔で俺を見てくる。

俺の右手に握られているのは、硝煙を上げるM9。

天井に向けて発砲したそれは今、前の席にいた女子の額に照準が合わせられている。「なあ、お前らは男より強えんだろ？ だったら此所で証明してみせろよ」

俺の言葉を聞いた女子は、何が起きているのかさっぱり解ってねえ面で俺を見上げている。

まあ、いきなり銃口向けられたら気が動転すんのは解るがな。

「そ、そんなモデルガン持ってきたら危ないよ？ 子供じゃな「玩具だと思うか？」」

声を震わせながら言ってくるのを遮り、今度はグラウンド側の窓に照準を合わせて引き金を引く。

再び轟音がクラスに鳴り響くと同時に窓ガラスが割れ、近くに居た女子が悲鳴を挙げた。

此所で漸く、俺が持っているものが本物だと理解したんだろう。

悲鳴を挙げるもの。

逃げようと席を立ち上がるもの。

クラスの中は、地獄絵図と化した。

「Don, t ^動 move」

俺の言葉に、クラスの奴らは動きを止めた。

恐らく…いや、今の俺は「仕事」をする時の顔になっているだろう。

命の奪い合いを…殺し合いを繰り返している時の顔に。

実際、奴らの顔は俺を見て恐怖に染まっているし、姉貴達は俺の変わり様に驚きを隠せてねえ。

「…これがお前達の現実だよ。I Sがあるから男より強いとか言ってるが、所詮は虎の威を借りた狐に過ぎねえ。今誰も俺を抑えられてねえのがその証拠だ」

そう言っつ溜め息を吐くと、俺は姉貴を見た。

「この際だから、ハッキリ言わないとな…なあ、織斑先生？」

「…何をだ」

何を？！決まっているだろ。

「I Sは所詮、コレと同じ人を殺せる道具で… お前達生徒は戦争の予行演習をしています、つてさ」

姉貴の言葉に呆れながら、俺はハッキリと…クラスの全員に聞こえるように言っつやっつた。

閑話 ある少年少女の話

この話は、海動一夏がISを動かし、「世界で二番目にISを動かした男」と世界に報道された時の、とある少年少女の、ちよつとした小話である。

とある少年の話

『繰り返しお伝えします。本日14時、世界で二番目にISを動かした男性が発見されました。名前は…』

実家の定食屋にあるテレビから流れるニュースの内容に、店の中は静まり返っていた。

名物の業火野菜炒めを作っていた爺ちゃんも、店に来てる常連のおっちゃん達も

そして…俺と、手を止めていた俺を殴ろうとしていた妹も。

全員が、テレビに釘付けになっていた。

「お、お兄…」

「あぁ…」

後ろに居た妹…蘭が声を震わせて俺を呼ぶ。

曖昧な返事しか返せていないが、それは蘭も同じだ。

「あれ……一夏さん……だよね？」

「……ああ」

テレビに映る、世界で二番目にISを動かした男……ソイツの顔を見ながら、蘭が眩く。

それに、短く……ハッキリと返事をする。

随分と外見が変わっているが……コイツは、俺が。

俺たちが知っている男……織斑一夏だ。

確証なんてものはあつてないようなものだ。

コイツは一夏だ、間違いない。

俺の中の何かが、そう告げていた。

暫くして、後ろから小さく嗚咽が聞こえた。

振り返ると、蘭が店の中にも関わらず泣いている。

「つ……一、夏さん……い、生きてたんだ……」

「ああ……あのバカ……生きてやがった……」

蘭の言葉に返事を返しながら、頬に暖かいものが流れるのを感じた。

だが、俺はコレを止めない。

これは……喜びの涙だからだ。

悲しみの涙は、3年前……一夏が居なくなった時に流しきった。

この涙は、アイツが生きていたと知った喜びで流しているものだ。

(バカ野郎…… やつと帰ってきやがって……)

アイツの事だ、あの時と変わらない笑顔で此所にまた来るだろう。

その時は、思いきりぶん殴って、そして言つてやる。

「おかえり」って。

俺は、涙を流しながらそう誓った。

とある少女の話

「え……？」

訓練の後、食堂で夕食を取っていた私は、テレビに目が釘付けになっていた。

周りの人が何か言っているけど……それも耳に入ってこない。

持っていたお箸が床に落ちたけど……それすら気にかける暇が無かった。

テレビから流れるニュースは、世界で2番目にISを動かした男が見つかったって

話。

でも……私は、そんな内容よりも、その男の名前に集中していた。

「い、ちか……？」

一夏……テレビのニュースキャスターは、ハッキリとそう言っていた。

他人の空似かもしれない。名前が一緒かもしれない。期待をするな。

心の何処かで、もう一人の私がそう言っていた。

でも……画面に映し出された男の顔を見て、私は目を見開いた。

逆立った髪に鋭い目つき。

何処かの軍服を着た、私と同じくらいの男が映っている。

それを見て……電流が走る感覚を覚えた。

見た目は違うけど……コイツは、私が知っている

私が好きなの……織斑一夏なんだ。

そう確信した瞬間、涙が溢れた。

「いち、か……生きてたんだ……」

止めどなく溢れる涙を抑える事無く、小さく呟く。

一夏がいなくなつた3年前のあの日……その時から、私の時間は止まっていた。

弾や蘭が懸命に励ましてくれていたけど、それすら聞こえず……あの時の私は、死ん

でいたようなものだった。

それは、中国に帰ってきてからの今までも変わらなかった。ただ、機械のように訓練を行う毎日。

何時からか、みんなが私を避けるようになっていた。

だからだろう。

近くに居た人達が、私を見てビツクリしている。

でも、関係ない。

あの時から止まっていた時間は動き出した。

だったら、止まっている暇はない。

一夏はきつと……いや、絶対にI S学園に行くに決まっている。

だから……今よりも頑張らなきゃいけない。

代表候補生になって、I S学園に行く為に。

(バカ一夏： 今度会ったら、思いつきりピンタしてやるんだから！)

一夏が帰ってきたとき、最初に「おかえり」って言うのは私なんだ。

そう思いながら、私は胸の前で拳を強く握った。

第三話 邂逅 Aパート

教室でのいざこざが終わった後：俺は、姉貴に襟首を掴まれて無理矢理生徒指導室に連行された。

あの直後、教室に他の教師が慌ただしくやってきたが、姉貴が自分が指導しておくつて事で追っ払っていた。

「…海動、私が何を言いたいか…解っているな？」

向かい合うように座る姉貴が、鋭く睨みつけながら俺に問いかける。

「なんで教室で発砲したか、と…なんであんな発言をしたかだろ？」

姉貴の視線を真っ向から受け止めながら、俺は短く返事を返した。

「実際に見てきたからな…中東じゃI Sを内乱の道具に使っているし、軍事目的での実験をしているのも知っている」

「…私設兵団W S O…無国籍の傭兵集団か」

俺の言葉を聞いていた姉貴は、暫くして口を開いた。

「お前のことは調べた。各国の内戦、紛争地に現れては金を稼ぐ傭兵達…それが、今のお前か」

「ああ。其処に居たからこそ言えるんだよ……どんなに綺麗事を抜かそうが、武装を積んでる時点でISは人殺しの道具だ」

姉貴の言葉に返事を返しながら、俺は席を立つ。

面倒な事に、あのドリルとクス野郎だけの筈だったいざこざに巻き込まれたんだ……対策を考える必要がある。

「一夏」

扉を開け、指導室から出ようとした俺を姉貴が呼び止める。

「……なんだよ」

「……やりすぎるなよ」

何かを言おうとして……漸く出た言葉を聞いて、俺は指導室を出て行った。

「……っ」

一夏が出て行くのを止める事が出来なかった私は、一人指導室の机に置かれた手で拳を握った。

先ほどの言葉が、私の頭の中を何度も何度も反芻する。

実際に見てきた……それが意味する内容を、私は何処かで否定したかった。

だが……調べた結果が、それを事実だと非情に突きつけてくる。

私設兵团WSOには…ある部隊が存在している。

曰く、戦場を駆ける死神。

曰く、髑髏を掴むもの。

曰く…第四の騎士。

出会ったものに待つのは死であり…彼らもまた、死へと駆けて行く。

彼らが歩んだ道には血の轍しか残らず、生き残るのはたった二人。

その部隊の名は…デスカプリース隊

一夏は…その部隊に所属している。

それが意味しているのは…一夏が戦場で人を殺してきたという真実だった。

姉貴と別れてから、俺は宛てもなく校内の廊下を歩いていた。

これから住む場所がどうなるかも解らないし、そもそも此処に居れるかも甚だ疑問だからな。

仮に此所を退学したら… 姐さんは呆れるだろうし、兄貴に至っては腹を抱えて爆笑する事必至だろう。

小さく溜め息を吐きながら、俺じゃどうにもならん事を考えていた時だった。

「だーれだ？」

背後からいきなり聞こえてきた声と同時に、視界が真つ暗になった。

声音からして女……。つか、此所は女子校だから女しか居ないのは当たり前か。

暫く考える振りをしながら、俺は後ろに居る奴に神経を集中させる。

背格好は俺より小さいな……。それに、今のところ殺気や敵意の類は感じられない。

だが、どこか探るような気配を感じる。

からかつてしているような声を使ったのも、自分のペースに引き寄せる為の手段としてだろう。

「此処に初めて来たのに、誰かなんて解るわけねえだろ。お前馬鹿か？」

そう言いながら目元を隠す手を退かし、後ろを振り返る。

其処に立っていたのは、水色の髪の水色の女だった。

リボンの色からして、同学年ではない……。つまりは、上級生だ。

そこまでしか解らないが……。同時に、あと一つだけ解った事が一つ。

コイツは、場数を踏んでいるという事だった。

それも、戦場を歩んできた俺とは違う、また別の感覚。

それを、見ただけでも感じ取れる出で立ちをしていた。

「初対面の女の子に馬鹿って、お姉さん哀しいわ」

そう言つて、懐から取り出した扇子で口元を隠す女は、悲しむような表情を見せずに余裕の表情で俺を見て

「海動一夏君だったかしら。：ちよつとお姉さんとお話しましょう？」
どこか牝狐のような笑顔を浮かべて、そう言つてきた。

第三話 邂逅 Bパート

「話だあ？」

「ええ。大胆にもこの学園に啖呵を切った貴方に興味を持つちゃった」

訝しげに女を見ると、そいつは扇子で口元を隠したままクスクスと笑う。

「調べさせて貰ったところ、貴方はISを殆ど触った事が無い…なのに、どうしてあんな啖呵を切ったのかしら？」

そう言いながらほくそ笑む女の顔を見ながら、俺は小さく舌打ちをした。

(気にいらねえ面だな…)

どこか、人を小馬鹿にするような、上から見ているような眼にイラついていると、女は扇子を閉じて改めて俺を見てくる。

「兵器を玩具かなにかと勘違いしている奴らが気に食わなかった…そんだけだよ」

「一週間後…クラス代表を賭けた試合があるらしいわね。貴方が考えてる程、代表候補生は甘くないわよ？」

手短かに話して部屋に戻ろうと踵を返すと、女が背中に声をかけてくる。

代表候補生が甘くねえだ？

んな事解つてる…だがな

「殺すか殺されるかの世界で生きた事のねえ奴に、死神が負ける訳ねえだろうが」

口元を歪め獰猛な笑みを返してそう言うと、俺は女の振り向く事無く部屋へと帰って行つた。

「…ふう、思つた以上の子だつたわね」

彼…海動一夏が去つた後、私、更識楯無は小さく息を吐いた。

妹の友人である布仏本音から、彼のことは聞かされていたけど、まさか此所までの氣配を放つとは予想外だ。

男の子が言う事だから、と高をくくっていたが、蓋を開けてみればどういふ事だ。

彼は普通の人とはまるで違う。

立ち居振る舞いや、彼から滲み出る雰囲気

それは、血腥い現場を知らなければ放てないもののもそれだった。

私設兵団WSO…中でも、死神と恐れられる部隊に居るといふ情報は伊達じゃない、
という事だろう。

そして…

(彼はきつと、知っているわね…)

携帯端末を取り出し、私は先日送られてきた任務の内容を再び開く。

其処に記されていた内容は：海動一夏と通称『髑髏の魔神』と呼ばれる機体の調査、及び危険度の確認だった。

「ふう…漸く着いたぜ」

あの女と別れてから部屋に着いた俺は、着ていた制服を着崩してベッドに倒れ込んだ。

今日は朝から面倒事のオンパレードだったからな…ダラけるのくらいは大目に見てくれると有り難い。

『海動、どうするつもりだ？』

「何がだよ？」

ダラけていると、朝から黙りっぱなしだった真上が声をかけてきたので、状態を起こして返答する。

幸いにもこの部屋は防音性が良いため、こうして話しても声が周りに漏れる事は無い。

仮に聞かれてもすれば、俺は明日から一人で会話するイタイ奴のレッテルが貼られる

事だろう。

『一週間後の模擬戦についてだ。相手の情報を調べなくていいのか?』

「オルコットとか言う奴の機体についてか?それなら…」

真上の言葉を聞きながらポケットから携帯端末を取り出すと、俺はあるディスプレイを表示する。

『ほう…』

「イギリスが作った第3世代機、ブルー・ティアーズ…1対多に優れた遠距離タイプ。中でも特徴なのは、機体の由来にもなった遠隔操作ユニット…簡単に言えばビット兵器だろ」

表示された画面に映し出されたのは、あのドリルが扱う機体についてのデータとスペック。

実はあの後、姉貴に呼び出される前に学校のデータベースにアクセスして閲覧可能なデータを拝借していたんだよな。

勿論、ハッキングとかはしておらず、山田先生にもデータの閲覧許可を取ったから罰せられる恐れはゼロだ。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず…相手と戦うにあたって常識だろ?」

『ああ、間違いないが…遠距離戦主体ならば、海動には分が悪いのではないか?』

真上の言葉に俺は小さく頷いて返答する。

俺の戦闘スタイルは兄貴譲りの格闘戦が主だ。

相性で言えば、俺ではアイツの相手は難しいだろう。

「ああ、だけどよ…お前、俺たちが負けるとでも思うのか？」

『…いや』

俺の言葉に真上は小さく笑う。

そう…確かに、俺とアイツは相性が悪い

だが…真上とアイツなら？

「教えてやろうぜ…アイツらが、誰に喧嘩を売ったのかをよ」

そういつて、俺はニヤリ、と口角を歪めた。

幕間 始まりを告げる鐘

私設兵団WSOが所有する移動拠点…スカーフェイス。

そのモニター室に、一本の通信が入った。

『こちらアモン7。スカーフェイス、応答してくれ』

「こちらスカーフェイス、アモン7の認証を確認。お疲れさまです、海動特務中尉」

モニターから発せられた少年…一夏の声に、オペレーターの女性が返事を返した。

『急な用事で悪いんだけど、荒神谷参謀に通信を繋いでもらえるか?』

牝狐に絡まれた後、部屋に戻った俺はスカーフェイスに通信を繋いでいた。

目的は一つ。

今回の件にカイザーを使えるかどうか、だ。

『荒神谷だ。IS学園はどうだね?』

「ガキの集まりですね。アイツらはどうも、ファクションとかスポーツの一環みてえに

「見てる奴が多いです」

オペレーターに通信を頼んで暫く、代わった参謀からの質問に溜め息を吐きながら返事を返した。

『我々と違い、戦争のない国で育つたのだ。仕方ないだろう…それで、世間話をするために私に通信した訳ではないのだろうか？』

小さく苦笑しながら返事を返してきた参謀だが、俺が通信した意図を察したのだろう。

眼光を鋭くして俺を見てきた。

「ええ。今回、愚弟とそれに噛み付いた馬鹿のせいで模擬戦が行われるのですが…なんの因果か、俺も巻き込まれて」

『それにカイザーを使えるかどうか…か』

俺の言葉に続くように、参謀は小さく呟いた。

その様子を見て、ダメかもしれないねえなという考えが頭を過る。

第一に、カイザーはWSOが所有している兵器だ。

俺はパイロットに任命されただけで、カイザーを貰った訳ではない。

第二に、カイザーは…ISではない。

扱いはISに似ているし、見た目も全身装甲と言えば疑われはしない。

だが…ISに搭載されているPICや絶対防御、ハイパーセンサーといったシステムを全く搭載していない。

機械仕掛けの鎧、と言った方が正しいかもしれないねえ。

それらから、今回の事にカイザーを出張らせられねえ…と思っていた。

『…ふむ、許可しよう』

「はい？」

だが、参謀から返ってきた返事は許可。つまりはOKサイン。

「良いんですか？」

『うむ。本来ならば許可出来ないが…此方としても、出撃させる事情があつてな』

あまりに呆気ないOKサインに肩透かしを喰らっていると、参謀は気になる発言をしてきた。

「事情？」

『うむ。君は織斑秋斗に専用機が支給される事を知っているかね？』

参謀の言葉に俺は小さく頷く。

今日の授業中、姉貴がそんな事を言っていた記憶があるし…それでクラスに一悶着あつたから印象が強い。

『実はアイラから通信を受けていてな…その機体を中心に世界が動くやもしれん、と言

われたのだよ』

「！アイラが……？」

その言葉に俺は息を呑んだ。

アイラというのは以前出会ったチベットに居を構える尼寺の高僧で、変わった力を持つている。

それは、これから起きるであろう出来事を予知するというものだ。

『万が一の事もある。海動特務中尉、心しておいてくれ』

「了解」

アイラの予知という事もあつてか、参謀の口調も何時もより硬い……それだけ、信憑性が高いということだろう。

俺は返事を返すと、通信を切った。

アイツの専用機が来るのは試合の日……一週間後だ。

それからどうなるかは……誰にも解らない。